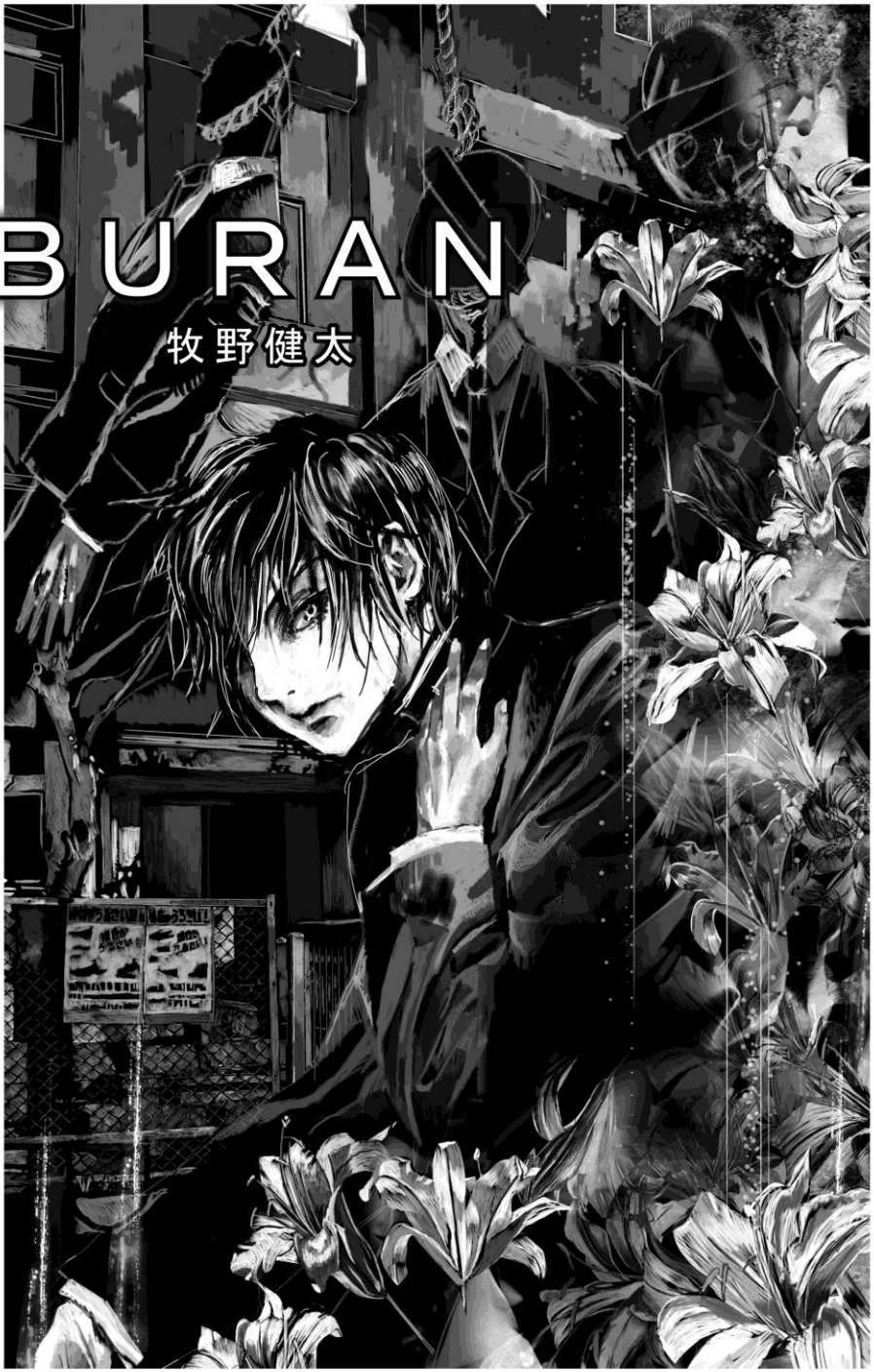

illustration　目黒詔子

その日、藤川優（ふじかわまさる）が学校から帰ってみると、まだその時間にいるはずのない父の靴が妙に丁寧に揃えられているのが目に留まった。

「父さん、帰っているの？」

奥に呼びかけてみるが、これまた妙な具合に静まり返った他人行儀の家屋に、優の声はじっとりと吸い込まれていく。

怪訝と不穏を纏った重い空気が全身を覆い始める中、土間をミシミシ鳴らしながら、優は家に上がった。

不思議なことに優が親しみを感じるだけの温もりが、この家には欠如しているのだった。

喉がひりつくように渇く。優は唾を嚥下するのにも苦労しながら重くなった足を速めた。

「父さん？」

優が干上がった掠れ声を無理にでも上げたのは、不安からではなかった。

奥の寝室から、何かが軋むミシリという音が聞こえたのだ。

それが父が床を踏み鳴らした音であると、優は直感的に悟っていた。

その優の直感は、半分ほどは当たっていた。

寝室のノブが回り、扉が軋んで悲鳴を上げ、ゆっくりと奥へと開く。

「父さん」と呼び掛ける筈だった優の声は、喉の奥に張り付いて滞った。

そこに居たのは寝室の梁に括られた紐を首に巻き、全身を「ぶらん」と吊った父親の姿だった。

ミシリは父が出した音ではあった。

只、それは足ではなく「ぶらん」となった身体を支える太い紐が発した合図のようなものであった。

父親の舌はだらしなく「ぶらん」と口から飛び出し、二つの目玉は眼窩からはみ出、全身の穴という穴から体液を垂れ流していた。

それを見た優は瞬時に頭の中が白く濁り、圧倒的なまでに突きつけられた父親の死に腰砕けになりながらも、必死に這ってその場から逃げ出した。

玄関に据えられた黒電話まで這っていき、震える手で受話器を握り、何をどう言ったか定かではないが、とにかく救急車を呼んで、そしたら同時に警察もやって来ててんやわんやの騒ぎとなった。

優がまだ十一歳の時の話である。

それから数年が経ち、優は中学に上がったが、まるで学校に通わなかった。

優の母親は夫を亡くして半月も経たぬ間に、若い男を家に連れ込み同棲し始め、それはそのまま父の「ぶらん」と関係する事柄であることは、十一の少年でも容易に判じ得た。

結局、母はその後、件の若い男と籍を入れてまるで実父など

初めから居なかったかのような生活態度を取り出した。
優は実父を好いていた。
無口でいつも本ばかり読んでおり、神経質で扱い辛い類の男であったが、それでも優は父が好きであった。
だから、突如沸いて出た戸籍上の父親などには何の情も抱かず、むしろ実父を追い込んだ母共々、憎んでさえいた。
だからこの若い男が、最初こそ優を気遣うふりをしつつ、籍を入れた途端に粗暴な本質を露にし、優を足蹴にした時など、むしろ清々した気持ちで、これで心置きなくこいつと敵対できるのだなと、ほくそ笑んだりもした。
しかし、あの日以降の彼の人生にはやる気というものが欠如してしまっており、学校で席に着いてクラスメイトと仲良くお勉強など耐えられなかったし、だからといって家に居場所もなく、そういう青少年が辿るお決まりのコースで、優は学ランのまま、昼間から街中を「ぶらんぶらん」と彷徨するようになった。
しかしこの行動に宛てがまるでなかった訳ではない。
時折、彼は狐憑きのような、奇妙にバランスの崩れた表情をすることがあった。
その時の優の視界を切り取ることが出来たなら、そこに首から上のない父親の亡骸が「ぶらん」と吊り下がっているのを見ることが出来ただろう。
その亡骸は、常に優の先へ先へと立ち塞がり、決して追いつくことはないのだが、追い続けていく内に、優を必ずある場所へと連れて行ってくれるのだった。
この日、優が父親の「ぶらん」に導かれていったのは路地裏に位置する築何十年かの錆びれたアパートだった。
薄暗い朽ちかけた階段をふらふら上がっていき、ある一室の前で立ち止まる。
もしもこの場に居合わせた者があったなら、この室内から僅かながら異臭が漂ってきていることに気付いただろう。
それは魚が腐敗した臭いにも似た、明らかな肉の成れの果てが燻っている臭いであった。
優は、その非バランスの表情のまま、部屋の前に佇んでいた。
まるで室内の様子を想像し、漏れ出る空気を楽しむように。
それはあの日「ぶらん」となった父親の前に辿り着くまでの行動を、反復しているかのようだった。
じっとりとした深い影が、少年と部屋との境目を曖昧にしていった。
時間にして十数分。その場所を堪能すると、優は踵を返し足早に去っていく。
その時の彼の表情は、普段からは考えられないほど満たされたものだった。
そして、優が堪能した場所では一日か二日後、必ず赤いパトランプが回るのだった。

とにかくそんな日々を、優は繰り返していた。
そしてその日もまた、優は例の顔つきになっていた。場所は、同じような建物が連なる貸家の一角。
いつものように父の亡骸に導かれ、異臭の漏れる扉の前でねっとりした闇との対話を済ませた彼は、満足気な表情で家路に着こうとしていた。
「ちょっと」
繁華街の前で不意に呼び止められた。
耳慣れない、女の声であった。
振り向けば、そこにはショートカットに眼鏡を掛けた、優等生っぽい制服の女学生が、興味深げに優のことを見ていた。
「何？」
優は対話の余韻を邪魔された不快さから、露骨に不機嫌な声を出した。
「あなた、藤川君じゃない？」
いきなり姓を呼ばれた優は内心、動揺していた。
（何だ？　この娘。同じ学校の奴か――）
どうにもこの女学生に見覚えの無い優は、答えようか答えまいかと逡巡していたが「違う」と嘘をつくのも躊躇われ、また、取り分け正体を偽る必要性も感じられず、
「そうだよ」
と潔く肯定してやった。
「やっぱり！　万年欠席で有名な藤川優君ね！」
余計な四文字と共に少女はやたらと元気よく言った。次いで
「私は佐倉夏子。覚えてない？　同じクラスで風紀委員なのだけど」
などと、優が聞いてもいないのに自己紹介までしてのける。
これに優は、
「ふうん」
と大して興味もなさ気に生返事をしてそっぽを向き、
「じゃあ、僕はこれで」
と軽く会釈して足早にその場を去ろうとする。
「あ、ちょっと」
夏子は尚も先刻と同じ科白でもって優を呼び止め、
「ここで何してたの？　何で学校こないの？」
と、この二つの疑問符を矢継ぎ早に繰り出してきた。
優は最初こそ無視して逃げようかとも思ったが、夏子がつけて来るような気配を醸しているのにたじろぎ、思わず、
「ここへは社会勉強に来てた。学校は僕の居場所じゃないから行かない」
と、彼女以上の早口で機械的な返答を述べ、背を向けるや一目散に駆け出した。
そしてあっという間に繁華街の雑踏に紛れ、見えなくなる。
その間、置いてきぼりの佐倉夏子は何事か叫んでいたらしいが、優の耳には届かず仕舞いだった。
何故なら優は兼ねてからご無沙汰していた生身の同年代、し

かも女子との一時の邂逅に、その心臓を打つ鐘突きの音はこの世の終わりを告げるが如く、連打を繰り返していたのだから。

次の日、またしても優は都市の片隅の掃き溜めみたいな住宅街を「ぶらんぶらん」していたが、その顔は浮かなかった。

どうにも調子が悪いのだ。

視界に父の亡骸が浮かんで来ることもなく、その散策はひたすらに空虚な彷徨と化していた。

それも何時間も経つ頃にはさすがに足が疲れてきて、

「帰ろう。今日はここじゃなかった……」

などと一人ごちる。すると今度は急に空腹を覚え、そういえばもう午後に差し掛かってきていることに気付いた優は、ファーストフード店に立ち寄って一番安価なハンバーガーとコーラを買い求めると、ショウ・ウィンドウとは逆側の目立たぬ隅っこの席に着く。

この時、彼はある違和感に気付き始めていた。

どうにも、この時間にしては自分と同じ学ランや、セーラー服姿の少年少女が多いのだ。

それが自分と同じくサボタージュなのか、それとも昼までの短縮授業だったのか優が判じ兼ねていると、自分に向かって笑顔で歩み寄って来る少女の姿が目に止まった。

それが昨日の、あの佐倉夏子とかいう娘であることが分かると、途端に優の心拍数が跳ね上がり、口に含んだコーラが逆流しそうになってしまう。

「こんにちは。また会ったわね」

ニコニコしながら優の隣に、スカートに気を配りながら座る夏子は、おもむろにバーガーの包みを開け、食事を始めようとする。

「なあ」

若干焦った優は、尻を焦らしながら、

「ここで喰うのかい？」

などと分かり切ったことを聞いてしまうのだった。

「そうよ。いけない？」

夏子は尚も人懐こそうな笑顔で言った。

か細い指で掻き上げたショートカットが瞬間的な芳香を放ち、優の鼻をひくつかせる。

「別に、いいけど」

優はもそもそとバーガーを齧りながら、更に尻を焦らす。

夏子はまるで愛玩動物を見るような目で優を見つめるとクスリと笑う。

その（優クン可愛い）とでも言いたげなバツの悪さに耐え兼ねた優は、咄嗟に先程からの疑問を口にした。

「あのさ、何でこんな時間に皆して居るの？　昼までで帰りなのかい？」

この質問に、夏子は明らかに身を硬くした。

そして声のトーンを幾分か落として言う。

「ああ、それはね。ちょっとした事件が起きたの」
「事件って？」
「生徒の自殺」
思わぬ発言に優はびくりとし、手の中のバーガーを取り零す。
「電気コードをね、首に巻きつけて屋上の柵に結わえて跳んだの。全体重が首に掛かって宙「ぶらりん」よ。お昼休みに起きたの。だから全校生徒早退」
「へえ」
何気なく相槌を打ちながらも、優の心は悔しさに揺れていた。
（学校で「ぶらん」か。今日、僕はそっちに足を向けるべきだったって訳だ）
しかし、悔しさだけではない悪寒のするざわつきを、彼は心の奥底に感じていた。
その原因は数日前に遡る。
まだ、夏子とも出会っていない前に。
優はいつものようにひたすら街中を彷徨していた。
まだ陽も高い午前中だったが「おい」と声を掛けられた。
優と同じ学ラン姿の少年だった。
同じ中学の生徒だろうが、誰かまではまるで分からない。というか、優が把握している生徒など、小学校時代の同級生数人位であった。
「何？」
少年は茶髪にごついピアスを空けた、露骨なほどにガラの悪い風貌をしており、見るからに不良生徒であった。
学校をサボっている点では優と大差ないが、優はコノ手の輩とは一線を引いている自覚があり、喧嘩や恫喝の類とも無縁で、万引き一つもしたことがなかった。
「お前その学ラン、鎌村中じゃん。俺もだよ。見ねえ顔だけど、名前は？」
少年は軽薄そうなへら笑いを浮かべて、優の顔を覗き込んだ。
身長は優より数センチ上であり、髑髏（どくろ）のピアスが下品に光っている。
この問いに優が黙っていると、少年は軽く優の肩を抱きこんだ。
「シカトはないだろ？」
そう言って肩を掴む手に力を込める。
「痛っ」
優が顔をしかめると、少年は優を一気に路地裏の方へと引きずり込んだ。
「一緒に遊ぼうと思ったけどよ。その気がねえならしゃーねーから、金だけ置いてけや」
少年はへら笑いのままそう言うと、優の腹を軽く小突いた。
「うっ」

思わず身体がくの字に曲がる。しかし、優はこの理不尽に屈しなかった。

「金は、無い」

無論、嘘である。

しかし実際の所、優の財布の中にはたかだか三千円ぽっちしか入っておらず、彼が小遣いに不自由しているという点に置いては「金は無い」は事実だった。

だが一不良少年にとって、この科白は反抗的態度以外の何者でもなかった。

「ほう、そうか」

などと言いつつ、少年は時に口笛を交えながら、優に暴行を加え始めた。

「出すまで止めねえぞ」

などとほざきながら。

しかし優は黙っていた。黙して、只ひたすらに暴力に耐えた。

小突かれて足蹴にされても「はい、お金ならここです。持っていって下さい」などとは絶対に言わなかった。

「へえ、いい根性してるじゃん」

しかし優は反撃もしなかった。勝てぬことは分かっていたから。

ガタイも気迫も経験も足りない彼では、この不良に歯向かった所で、のされて終わりだろう。

だからこの沈黙、ダンマリは、藤川優に残された、只一つの意地とも言えた。

だがそれも長くは続かず、最後には転ばされた末に腹を蹴られ、学ランの内側に抱き込んでいた迷彩柄の安物の財布がズルッと滑り落ちた。

「あ、発見」

不良少年は馴れた手つきで優の財布を拾い上げると、中身を見て鼻で笑い、

「少なっ」

と吐き捨てて札を引き抜くと、用済みの財布をポイ捨てし、

「シケてんな」

と、お決まりの棄て科白を残して去っていく。

優は声一つ上げずに、自らの僅かな金が理不尽極まりない暴力によって他者へと渡った様子を見ていた。

しかし、無表情の外見とは裏腹に、優のハラワタは屈辱に打ち震え、煮立って沸騰し、去り行く少年の後姿を、射殺したい願望でもって睨めつけていた。

すると、どうだろう。少年を睨む優の視界の端の方に、いつも優を導いてくれる父親の首なし死体が「ぶらん」と揺れながら現れたのだ。

そしてその死体は「ぶらんぶらん」しながらも意外な俊敏さで、去り行く少年の後姿に重なっていくのだった。それはまるで観光地などにある顔だけ刳り貫いた人型パネルのようだった。

（いいぞ）

と優は思った。

（父さん、そのままその糞野郎を連れて行っちまってくれよっ）

事実、首なしの父親は少年に張り付くような格好のまま、一緒に小さくなっていった。

と、いうことがあった。だから優は内心、動揺していた。

その時は憤怒の余り、脳内が見せた幻視ではないかと思い、ならば普段から見ているのは何なのか自問を繰り返したりもしたが、結論は出ないままだった。

それが、今、目の前の佐倉夏子が告げた生徒の自殺が、どうにもあの首なし死体が重なった少年の行く末であったと思えて仕方が無いのだった。

「その生徒って……どんな奴？」

優は恐る恐る聞いた。

「え？」

「いや、僕と同じクラスの奴かなって」

「ううん、違うわよ」

夏子は、優がこの話題に興味を示したのが意外とでも言うかのような、はたまた、嬉しいとでも言うかのような、絶妙な表情をした。

「三年の不良よ。ろくに学校にも来てなかったみたい。イイ噂は聞かない人だったけど？」

「……ふうん」

ことも無げに肯いてコーラに口を付けた優だったが、それでも、内心の動揺が堰を切って溢れそうになるのを堪えるので必死だった。

ともすれば今すぐに、

「その不良は茶髪で髑髏のピアスをし、不当に手に入れた三千円を懐に忍ばせてやしなかったか⁉」

と、夏子に問い質してしまいそうだった。勿論、そんなことは出来る訳もなかったが。

また、夏子の放つ妙にきな臭い視線も気になった。

まるで何かの確認作業をしているような気がするのだ。

無論、気のせいだろうとも思う。それでも今の優には、コーラの炭酸すらまるで感じられぬ程、夏子の射すような視線が気懸かりで仕方なかったのだ。

結局、その日は早めに帰宅した。すると、仕事も無い癖にいつもどこかをほっつき歩いている義父が、珍しく帰ってきており。しかも運悪く一杯ひっかけた後だった。

「お前、早いな。学校はどうしたんだよ」

興味も無い癖にこの男がこんなことを聞いてくるのには、はっきりとした理由（わけ）がある。優の返答をとっかかりとして、難癖を付ける為である。

だから優は義父にじろりと一瞥くれて、邪険に無視してやる……ことも出来たのだが、この日は出来るだけ面倒なことにはなって欲しくないという一念で、優にしては破格とも言える丁

寧さで、義父にあらましを説明してやった。
　すると義父は、さも可笑しそうに一笑し、
「なんだそりゃあ、お前の親父と同じ死に様じゃあねえか。こんなこともあるもんだなあ。もしかするとお前の周りにゃ首吊り死体が自然発生するのかもしんねえな。おい、俺は勘弁してくれよ。あんな糞尿垂れ流しのみっともねえ極みみたいな死に方、俺ァごめんだからなあ」
　実父への侮辱とも取れる義父の言いように、優は両の拳を握り締めてぐっ、と堪えた。
　そのまま踵を返して自室へ去ろうとしたが、去り際に義父が発した科白が優の努力を台無しにした。
「お前の親父は本当の負け犬だもんなあ」
　カアッと優の頭に血が昇り、気が付いた時には義父の胸倉を掴んで鼻っ面に拳を叩き込んでいた。
　鼻血の筋が宙を舞って、義父の身体が安物のソファに沈み込む。
「てめえ今度父さんの悪口言ってみろ！　てめえの首に紐結わえて梁に吊ってやるからなあっ！」
　鼻息荒く優が去って、その場はこれで済んだ。しかしその後、優はシラフになった義父と実母から私刑（リンチ）という名の折檻を受ける。ぼこぼこに殴られ蹴られ、口汚く罵られた上で手足を縛られ、自室に放り込まれた。
　その時、優はこう思った。
（コイツら畜生共、残らず首括っちまえばいいんだっ）
　しかしそんな怨念のこもった目を二人に向けているにも関わらず、優の視界に父の亡骸は現れなかった。
　翌朝、うとうとした淡いまどろみの中に居た優は不意に実母に叩き起こされた。
　母によると玄関に友達が迎えに来ているということだった。
　戒めを解かれながら、
（僕に友達なんか居やしないんだけどなあ）
　と訝（いぶか）しむ優だったが、手首の辺りを擦りながら玄関まで出て行ってはっとした。そこには、佐倉夏子がぽつんと突っ立っていた。
　母に怪しまれぬように「おはよう」などと白々しい挨拶を交わして、優は昨日から着たきりになっている学ランのまま表に出た。
　しばらく無言で歩いた後、優は夏子の耳元で、
「僕達はいつの間に友達になったんだよ」
　と低い声で言った。
「アラ、違ったかしら？」
　なんて調子で嘯（うそぶ）く夏子に優は苛立ちを隠さずに言った。
「迎えに来られたって僕は学校にゃ行く気ないぞ」
　すると夏子は意外な返事をするのだった。
「それは奇遇ね。私もよ」
　優は一瞬、耳を疑い、立ち止まると夏子の顔をまじまじと見

た。
彼女は続けて、
「さあ、行きましょうよ。藤川君がいつも社会勉強に行く場所に案内してちょうだいよ」
と言った。その顔には微笑が浮かんでいる。今まで彼女を見た中で、一番優しげな微笑が。
優は心臓を鷲掴みにされたような動揺を味わっていた。
（コイツは知っているのだ。僕の秘密を）
「ねえ、聞いてるの？」
（コイツは誰だ？　佐倉夏子――そんな奴はクラスに居たか？僕の記憶にないだけか、それとも――）
優は咄嗟に身を翻した。
逃げようとしたのだ。
今は一刻もこの場に居たくなかった。
「待ってよ」
まるで計ったかのようなタイミングで、夏子の手が優の手首を掴んだ。
グンと身体が突っ張る。
振り切ろうにもそれが出来ない程、少女の握力は強かった。
「何だってんだよ！　僕がどこでナニをしようが、君なんかに干渉される謂われはないぞっ！」
後半泣き声になりながら叫ぶ優。
尚も手首を握り続ける夏子の表情に、既に笑顔は無かった。
眼鏡の奥の眼がどんよりと濁っているように見える。
「藤川君……何を怯えているの？　私は君の味方なのに。〝同じ苦しみを持つ人間〟なのに。仲良くしましょうよ」
淡々とした調子で語りかける夏子に、優の恐怖は倍増した。
「い、嫌だ。僕は仲良くなんか、したくない。一人で十分だ」
「アラ、それは残念」
そう言うや否や夏子は握った優の手首を捻り上げた。
「ぎゃっ」
悲鳴を上げて優が不自然な体勢で膝を折る。
「これでも、仲良くしない？」
「お前……誰だ？　本当に佐倉夏子か……？」
尚も絞り上げられる腕の痛みに絶え絶えになりながら、優が問う。
夏子はここで元の微笑みを少しだけ戻して、
「私が誰か知りたければ〝私達と仲良く〟することね」
と言った。
「私達、だと？」
「そうよ」
その言葉を合図に夏子は優の腕を解放した。
どうと音を立て、腕を庇いながら這い蹲る優。
「明日の朝、藤川君を迎えに家の前まで行きます。正式なお返事はその時に」
夏子は詳しく言及することをせず、また優と同行することも

止めにしたようで足早にその場から去っていった。
「あ、そうそう」
最後に彼女は付け加えた。
「お家にサプライズを用意しておいたから。今日は早めに帰ることをオススメするわ」
優はナニガナニヤラ分からぬ極めて不愉快な気分のまま、気持ちを落ち着ける為だけに街中を彷徨してみたが、夏子が去り際に言った「サプライズ」とやらが気になり、昼前には自宅に戻った。
「ただいま……」
敷居を跨いだ瞬間にした嫌な予感は見事に的中した。
帰宅した優を待っていたのは、首に幾重にも巻いたビニール紐を括りつけ、「ぶらん」と吊り下がった義父と実母の亡骸だった。
その時、不思議と驚きは無かった。
こんなことは分かり切っており——つまりは事後確認のようなものだったのだ。
優は飛び出した二人の目や舌、滴る体液の異臭を捉えながらも、哀しみなどは微塵も沸かず、どこか漠然とした怒りのようなものが、心の奥の方に沈殿していくのを感じていた。
それは、仮にも両親を殺された怒りとは異質のものであり、いわば獲物を横取りされた獣（けだもの）の心境に近かったかもしれない。
優は憤然としたまま電話口まで引き返していって、連絡先諸々が書かれた紙に指を這わせた。そして、自身の通っているはずの中学に電話を掛けた。
警察も、救急車も、呼ぶ気がしなかった。
それが、実父の「ぶらん」の時と最も違う点であり、言わずもがな、愛情の差だった。
優は物言わぬ骸と化した二人に、最早なんら興味は無かった。
いや、それはきっと生きていた時からのことなのだろう。
優はこの二人の身勝手な人間に、敵意しか抱いて来なかったのだ。

翌朝、優は玄関の磨り硝子の先に人影を認めた。
彼は一睡もしていなかったが、眠くはならなかった。さすがに緊張しながら戸を開けると、佐倉夏子が昨日の朝にも見せた自然な笑顔で立っていた。
「おはよう。サプライズは気に入ってもらえた？」
のたまう夏子に優は剣呑な一瞥をくれながら、
「ちっとも。嫌な気分しか残っちゃいないよ」
と吐き出した。
「そう」
と夏子。
「それに、僕の通う中学にゃ佐倉夏子なんて生徒は居ないそうだぞ。〝君ら〟は意外と詰めが甘いんだなあ。せめて実際の生徒の名を頂くなりしなよ。工夫が足りないよ」

昨夜、電話で突き詰めた事実を憎たらしい口調で言ってやると、夏子は涼しげに笑って、

「アラそう。ごめんなさいね。君は〝お仲間候補〟だから、気安くなるには接点が必要だったのよ。それと、君は不登校児なのだから、『僕の通う』には語弊があるんじゃないの？」

と優以上の憎たらしさで返してきた。

その小馬鹿にした態度が我慢ならぬほど鼻についた優は、玄関口の柱をばこんと殴り、

「笑ってんなよ人殺し。お前がどうやったかは知らないが、こんな勝手な真似が許されるわけがないんだからなあ」

とドスを効かせて言ってやった。しかし夏子は馬鹿を言うなとばかりに声を出して笑うと、

「〝どうやったか知らない〟はないでしょう？　君が絡まれた不良に使ったのと同じ力よ。目ん玉の中で『ぶらん』となった誰かの姿を重ねただけ。分かってるでしょ？」

と自身の目を指差して言った。

優は咄嗟に口を噤んでしまった。

予想はしていた。間違いなしと思っていた。

しかし直接告げられるとやはり戸惑ってしまう。やはり優はあの時の不良を殺したのであり、彼女は「同種」の人間だったのだ。

「ふうん、なら僕とお前は同じ穴の何たらってわけだな。他にもいるのか？〝お前ら〟は人殺し集団なのかい？」

「ええ、居るわ。他にも沢山」

平静を装って口数の増えた優の問いに、夏子は淡々と返した。

同時に、優はこの家の周りに不穏な気配が満ち満ちていることに気付く。

「今はまだ誰にも評価されない日陰の存在だけれども、その内、世界が私達を必要としてくるはずよ。だから藤川君も一緒に行きましょう」

夏子は握手を求めて片手を差し出した。

この手を取れば、優は彼女達の仲間となる。

優はこの時迷っていた。別にこの場に居たっていろいろと面倒なだけなのだ。身内が三人も首を括った家の子供など、親戚中をたらい回されるにはこれ以上ない絶好の素材である。

この娘と一緒に行けば、違う世界が開かれるかもしれない。

例え人の道を外れる結果となっても……。

「お前らの名は？」

「ＢＵＲＡＮ（ぶらん）」

優は夏子の手を取りかけて、止めた。

「どうしたの？」

「僕がその組織に入る事で、どんな得があるっていうんだい？」

それは単に、容易な決心が兼ねた優の急場しのぎの一言だったのだが、これが思わぬ事態を招く。

「さっきも言ったけど、いずれ世界が私達を必要として来るの。当然、とんでもない額のお金が動くわ。私達も大金持ちになれ

る」

「それだけ？」

優のつまらなそうな反応に、夏子は不服を顔に出しながらも言葉を重ねた。

「〝居場所〟が出来るわよ。私達には決して与えられなかったものよね。だから、〝肉親を殺す羽目になった〟」

この一言で、優の表情が一変する。

「なん、だと？」

「アラ？　もしかして気付いてないの？　私達のこの力はねえ、強い殺意が起因しているのよ。それは君も同じ。私の場合はイヤらしい義父が相手だったけどね。思い出しなさいよ。近しい人が『ぶらん』となる前のことを」

瞬間的に、優の脳内にフラッシュ・バックが起きる。

それは自ずと隠していた記憶だった。

父が自殺する前日――優は父親と些細なことから言い争いになった。原因は今となってはよく覚えていない。

とにかく態度の悪かった優は神経質な父親を激昂させ、平手の一発を顔にもらった。

その時である。

優は、一時の感情の昂ぶりとは言え、目の前の父親に、明確な殺意を持ってこう念じた。

〝死ねっ――〟

「うわあああああっ」

優は突然突きつけられた事実に、頭を抱えて狂ったように暴れ出した。

「思い出したようね。そうよ。お父さんは君が殺したの。法の裁きからは逃れられても、君はこの苦しみからは永久に逃れることが出来ないのよ。居場所はどこにもないの。私達と一緒に来る以外はね」

優は呻きながらも、縋（すが）るような気持ちで夏子を見た。

そこに居る少女は悪魔のような女の筈なのに、今は天使のように見えた。

「さあ、一緒に行きましょう。藤川優君」

夏子は再度、手を差し出した。

優はゆっくりと手を伸ばす。

しかし、指が触れる寸前で、またしても止まった。

夏子が「はあ」と露骨に溜め息を吐き、

「今度は何？」

と、呆れた調子で言う。

「僕は父さんを殺した」

「そうよ」

「好きだったのに。でも、一時の感情の爆発で、恐ろしいことをしてしまった」

「だから、それは私も同じ。でも恐がることじゃないわ。むしろ歓迎すべきよ。素晴らしい力を手に入れたのだから」

この時優は、虚ろな顔をしていた。まるで夏子の言葉など聞

いていないかのようだった。
「僕は、今日までずっと、苛立っていた。何か分からないけど腹を立てていたんだ」
優は吶々と語り出した。
「それは、義父にであり、母さんにであり、学校の先生や同級生に対しての感情だと思っていた」
「ちょっと、君は何を言っているの？」
夏子の顔に不審な色が浮かぶ。
「でも、僕の怒りは誰にぶつけても晴れやしなかった。その理由が、やっと分かったんだ」
優はここで一度、言葉を切った。
「父さんだよ。僕の激しい苛立ちは、父さんだけが受け止めてくれた。僕は父さんことを大好きだけど――大嫌いでもあったんだ。だから……」
優が父に抱く感情は、愛憎が入り混じったものだった。
それは誰もが少なからず心の内に飼う、近しい者に対する思いである。優はそれを長く飼い殺していた。その結果、彼の心の奥の闇は、常人のそれの比ではなく――。
「君達はどうだい？　僕の苛立ちを、受け止められるのかい？」
その時、夏子の顔色が明らかに変わった。
「包囲、縮めっ！　こいつ、やばいよっ！」
この号令に家の周りが急に慌しくなる。
幾つかの、影が動く。
優の顔つきが、あの父の亡骸に誘われていた時のようにバランスを欠いていく。
（父さん。父さん。僕のこの力は、世界を動かす為なんかじゃあないよね？　この力で鬱憤を晴らすのも違うんだ。父さん。この力は父さんに手向ける花だ。それと突きつける剣なんだ）
優はこの世界から取り残されたような顔で、まずは夏子を凝視した。
いつの間にか日が翳り、霧のような深い闇が辺りを包む。
優の目の前では首の無い父親の亡骸が、いつまでも「ぶらん」と揺れていた……。

牧野健太

三重県在住の 26 歳
本誌の№８にて同人デビュー
実家のパン屋に勤めながら細々と創作を重ね、
以降の本誌において短編を多数発表
ＪＵＲＡ30 号にて念願の初長編を完結させる
メールアドレス：kentaversusyou@msn.com

Makino Kenta

目黒詔子

東京都生まれ。イラストレイターズ通信会員。
角川書店「ロードス島伝説ベーシックルール」「ロードス島伝説エキスパートルール」カバーイラストでデビュー。
主なクライアント（五十音順）
角川書店・学研・光文社・祥伝社・竹書房・徳間書店・早川書房・美術出版社・ホビージャパン・ＭＤＮ・ＮＴＴ・ＳＥＧＡ等。
今迄の取扱いジャンル
歴史・ファンタジー・神話・伝奇・ＳＦ・ホラー・サイバーファンタジー ・ミステリー数十冊の装丁画を手がける。代表作「七王国の玉座」「王狼たちの戦旗」（ジョージ・Ｒ・Ｒ・マーティン著／早川書房）、日本出版社の新書、菊地秀行シリーズ等。
雪月華「NEWYORK 雪賞」受賞。海外の出版社での紹介多数。
ＨＰアドレス http://serene.jellybean.jp/
メールアドレス meguron_2007@mail.goo.ne.jp

Meguro Noriko